

ブリの資源評価について

長崎県総合水産試験場 漁業資源部 海洋資源科

はじめに

ブリはTAC候補魚種として検討が進められており、その管理目標については、国の水産資源研究所が関係県と共同して行う資源評価結果を基に提案がなされます。二〇二二年一二月にブリの資源評価会議が開催され、評価結果が公表されています。

ブリの生態について

ブリは全国で一つの系群として扱われており、東シナ海から北海道まで広く分布しています(図1)。流れ藻につくブリの稚魚(モジャコ)は、三〜四月に薩南海域に出現し、日本各地の沿岸へ来遊します。成魚は産卵のため、冬から春に南下回遊します。

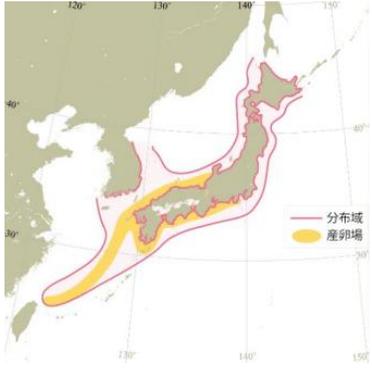


図1. ブリの分布域と産卵場 (水産研究・教育機構より)

漁業の状況について

本種は主にまき網と定置網で漁獲されています。日本海西および東シナ海区ではまき網、北海道区、日本海北区、太平洋北区、および太平洋南区では定置網が漁獲の主体となっています。

我が国の漁獲量は一九九〇年以降、増加傾向にあり、二〇一四年には過去最高の一・五万トンとなりました。二〇一五年以降は一〇〜一二・三万トンの範囲で推移しています。韓国のブリ類の漁獲量は二〇〇八年から大きく増加し、二〇二〇年まで一・九〜一・九万トンの範囲で推移しています(図2)。

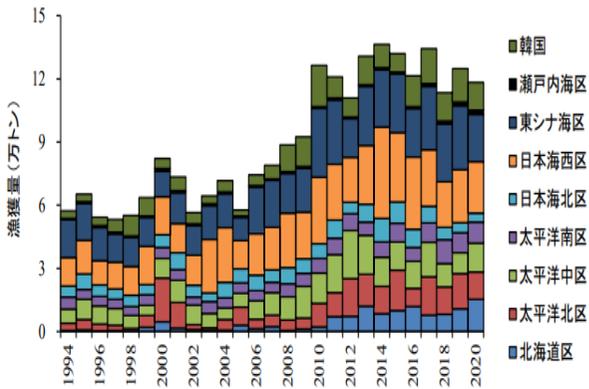


図2. 海区別漁獲量 (水産研究・教育機構より)

モジャコ採捕について

モジャコは関係県が策定する採捕計画に基づいて養殖用種苗として採捕されています。一九七六〜一九八三年には、採捕計画尾数に対する実際の採捕尾数の割合(充足率)が一〇〇%を超える年もありました。しかし一九八四年以降、モジャコ採捕尾数は減少傾向となり、二〇〇八〜二〇二〇年には一四七五〜一九四五万尾、充足率は六四〜八六%で推移しました(図3)。

また、資源管理目標は、持続的に最大の漁獲量（最大持続生産量：MSY）を得られる状態とされており、本種の場合、MSYは一三万トン、MSYを実現させるための親魚量は二二・二万トンと算出されていますが、二〇二〇年の本種の親魚量は一四・四万トンと目標を大きく下回っています（図5）。

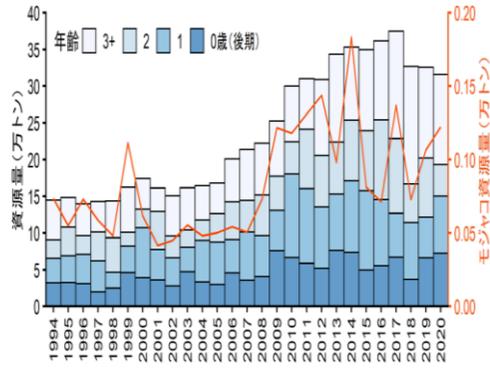


図4. 年齢別資源量の推移
(水産研究・教育機構より)

本種の資源量は二〇〇八年まで一四・二二・三万トンの範囲で推移していましたが、二〇〇九年以降は増加傾向にあり、二〇一七年には過去最高の三七・五万トンを示しました。二〇一八年以降は三二万トン前後で推移しています（図4）。

資源の状態について

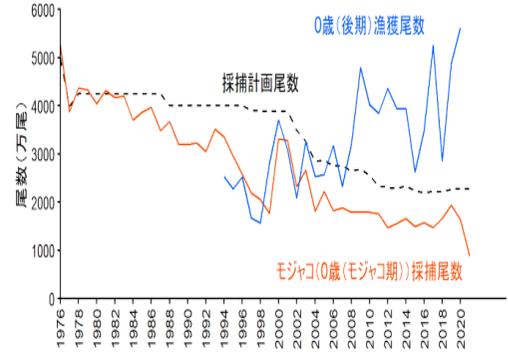


図3. モジャコ採捕尾数、採捕計画尾数
(水産研究・教育機構より)

二〇二二年二月には、令和4年度ブリ資源評価会議が開催され、最新の資源評価結果について検討がなされます。また、漁業者や関係者が自由に参加でき、本系群の資源管理方針について検討する検討会（ステークホルダー会合）も開催予定とされています。

※わが国周辺の水産資源の現状を知るために
(<http://abchan.fra.go.jp/index.html>)

(担当 柴田 陽佑)

β	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032
1.0	11.8	12.2	10.6	11.8	12.3	12.7	12.9	12.9	12.9	12.9	12.9	12.9	13.0
0.9	11.8	12.2	9.8	11.3	12.1	12.7	12.9	12.9	12.8	12.8	12.8	12.8	12.8
0.8	11.8	12.2	8.9	10.7	11.8	12.6	12.7	12.6	12.3	12.2	12.3	12.3	12.4
0.7	11.8	12.2	8.0	10.0	11.3	12.2	12.2	11.9	11.6	11.4	11.5	11.6	11.7

図6. 管理基準案と禁漁水準（水産研究・教育機構より）

資源評価結果に基づき提案された漁獲管理規則（案）では、目標管理基準値となる親魚量を実現するための将来の平均漁獲量は、二〇二〇年の一一・八万トンに対して、標準的な安全係数（ $\beta = 0.8$ ）とした場合、二〇二二年は八・九万トン、管理目標年度である十年後の二〇三二年は一二・四万トンと予測されています（図6）。

将来の漁獲量について

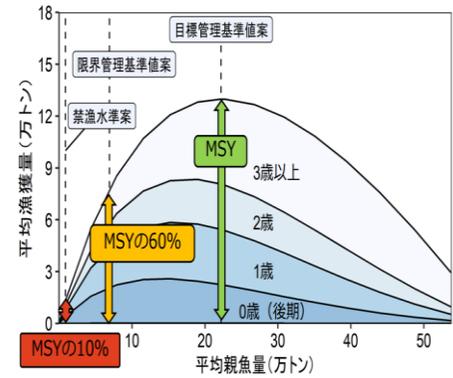


図5. 管理基準案と禁漁水準
(水産研究・教育機構より)